

『子羊ちゃんのレジスタンス』

著: 森本あき

ill: 三尾じゅん太

「分かった」

ここは、認めよう。認めて、どうなるのかを見てみよう。

「たしかに、俺は昨日、チキンを食べた。だけど、それがどうした？ たまになら、みんな、やってることだろう」

「まあね。ファストフードは、本当に禁断の果実だ。ぼくも、たまに食べる」

「なら…」

なんの問題もないじゃないか、とつづけようとしたところをさえぎられた。

「だけど、やけ食いはしない。どうしても食べたくて、我(が)慢(まん)できなくて、手を出してしまって後悔する。そんな食べ物なんだ。自分の体を痛めつけたり、逆に、それで何かを発散させようとするのは、よくない合図だよ」

おまえは俺のセラピストか。そんな分析いらねえよ。

心の中だけで突っ込んで、紫月は黙ったまま、穂積のつぎの言葉を待つ。

「つまり、何か相当なストレスが紫月にはある。そのストレスの原因は、生徒会長選挙に関すること以外に考えられない。だとしたら、紫月がヤケになって、ぼくの評判を落とそうとするかもしれない。あのとき、ぼくを脅したみたいにね」

にっこりと笑う穂積の顔が、ゆらゆら揺れている。

おかしい。これは、めまいじゃない。もっとひどい症状だ。

救急車。いや、でも、穂積に借りを作るわけには…。

「効いてきた？」

穂積が紫月の顔をのぞき込んだ。近いはずなのに、顔が遠い。声も遠い。

「お抹茶でも苦味があるから、結構、気づかないものなんだね。勉強になった。さすがに、紅茶や日本茶だと無理だっただろうけど」

「何を…」

ふらふらする。ゆらゆらする。こんな感覚、初めてだ。

「おねしょの話、ぼくはすっかり忘れてたんだ。幼稚園のころって、ぼくが一番、弱いときだから。無意識に記憶を封印してたのかもしれない。そういえば、あのころは紫月と仲よかったんだなあ、って、言われて初めて思い出したぐらい」

ぐらぐら、ふわふわ、ゆらりゆらり。

体がどう動いているのか、自分でも分からない。

「紫月はね、ぼくとはまた別の意味で人気があるんだよ。知ってる？」

知らない。知るわけがない。人気があるなら、生徒会長選挙で、あんなに惨(ざん)敗(ぱい)しなかったはずだ。

口にしたいこと。したくないこと。

何も出てこない。

いったいどうしたのか、まったく分からない。

「お人形さんみたいなきれいな顔で、色が真っ白で、なのに、妙な色気がある。彼女を

連れ込むのも、女を買うのも、ここは自由だし、女に不自由するような生徒はいないのに、紫月を狙っている輩(やから)はたくさんいるんだ。生徒会長選挙のとき、ああ、この子は自分の魅力がまったく分かってないんだ、って気づいたよ。権力だったら、ぼくに負ける。魅力だったら、五分五分。ぼくは、自分の体だって使うよ。ただし、ぼくに抱かれない、と願っている子に奉仕する側だけだ。紫月は、逆。紫月に欲望を抱いている相手に、その体を差し出せばよかったんだ。そうすれば、半分は紫月に流れたらうね。まあ、そうなったら、投票までひやひやしてなきゃいけないから、阻(そ)止(し)したけど」

穂積の言葉の意味が、半分も頭に入ってこない。

選挙の戦い方をまちがった。

それを指摘されているのは分かるけれど、それ以外が、理解できない。

抱く？ 抱かれる？ どういうことだ？

「でも、紫月は気づかない。もしくは、気づいてもそれを使いたくない。つまり、紫月の弱点は、そこにあるんだな、って」

「おね…しよは…」

もしかして、本当は言われなくなかった？ あのとて、平気な顔をしていたのも、実はブラフ？

「本当に言ったらどうしようかと思った。ぼくには、いま築いているイメージがある。昔、泣き虫で、臆病で、乳母の陰に隠れてて、あげくにおねしよしたのを紫月にかばってもらった、なんて知られるわけにはいかない。選挙が終わっても、紫月のことは、こっそり見張ってた。負けたことを受け入れて、ぼくに何もしてこないならいいけど、攻撃してくるなら動こう、ってね。ヤケ食いは、そのサインのひとつ。これから、どんどん、あのとて、おねしよのことを言っておけば、と後悔して、最終的にばらすことになるかもしれない。そんな危険、放っておくわけには。だから、ぼくのおねしよとおなじくらい恥ずかしい秘密を、紫月には持ってもらう」

「意味が…」

恥ずかしい秘密？ 何それ？

「紫月は真(ま)面(め)目(め)すぎるよ。もっと遊んだほうがいい。勉強ができて、策略ができない。駆け引きも下(へ)手(た)。それは、あまり人と接してないからだね。ここまで言っても、ぼくが何をしようとしているか分からないなんて」

分かるわけがない。頭がボーっとして、いつもよりも理解力がないのだから。

それよりも何よりも、穂積の言っていることの意味がまったく分からないから。

「紫月が本気で狙われてないのは、男好きで淫(いん)乱(らん)だという事実をだれも知らないから」

「おと…こ…好き…？」

淫乱？

いったい、だれのこと？

「ついでに、紫月のお父さんは半(はん)端(ぱ)なく権力を持っている。それを使われたらやっかいた、と、みんなが知っている。だれも、ぼくに手を出さないようにね。でも」

ふらり、ふらり、と傾いていた体の揺れが、少し収まった。焦点も、穂積に合う。

「紫月がだれかに抱かれて、喜んでいる姿がどこかに出たら？」

穂積の声が、低くなった。さっきまでの笑っているような響きはない。

「写真が掲示板に貼られたら？ みんなのメールアドレスに、一(いつ)斉(せい)送信されたら？ それどころか、腰を振りながらあんん言ってる動画がどこかのサイトにあげられたら？」

「そんなこと…するわけがない…」

「だいたい、だれが好き好んで、俺を抱こうって言うんだ？ さっき、穂積が言っていたことが、ようやく、脳に到達する。

紫月を狙っている輩。

…そんなの、いるわけがない。

「しないだろうね。普通の状態なら」

穂積が、にい、とでも形容したいような邪(じゃ)悪(あく)な笑みを浮かべた。その手には、小型のピンを持っている。

「でも、いま、紫月は普通じゃない。体がふらふらしてるのが収まったら、ちがう感覚が目覚め始める。これは、うちの会社で作っている、性感帯のみを何倍も敏感にする薬だ。処女の子が、最初から快楽を求めたくて、もしくは、やりすぎて感覚が麻(ま)痺(ひ)してきた女性ももっと刺激を欲(ほっ)して、全世界でかなりの数を売り上げている」

「それが…」

めまいみたいな症状が収まったら、ようやく、口がきけるようになった。だけど、いつもよりも少し唇が重い。

「なんの関係が…」

「お抹茶に入れた。吸収してすぐにふらつくように感じて、それが収まれば始まり。三時間はつづくのかな。それで十分だよ」

穂積が立ち上がって、紫月のそばにやってくる。

「紫月の弱みを握るにはね。紫月がぼくのおねしょについて口外しないなら、ぼくも、紫月がこれからされることに関しては、ずっと秘密にしておく。おたがい、恨みっこなしで、全部を忘れようじゃないか」

「何を言ってるんだか…わかんないんだけど…」

穂積の雰囲気がいづもとちがうことだけが、紫月が理解できる唯一の事実。

「この学園の生徒全員に、ぼくに抱かれて精液まみれになっている姿を見られるか、幼稚園時代のぼくのことを完璧に忘れるか、ふたつにひとつ。そういうこと」

「忘れるっ！」

あんなの、もとから本気じゃなかった。穂積が本気で気にしていたと知って、驚いているぐらいだ。

本文 p46～52 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>